

質問書方式による考える力をつける教育実践 3

Think more deeply by making a question 3

田 中 裕

キーワード：質問、考える力、教育実践、読書百遍、多読

要 約

この論文は、前回^[1]に引き続き講義「見えない世界」での教育実践の報告である。この講義は質問を作ることを軸として、何度も読むことにより、多面的に考える力と読む力をつけることを目標としている。方法の骨子は「質問書方式」、「SQ3R 法」、「読書百遍」及び「グループ討論」の4つの方法を組み合わせたものである。前回の報告と異なる点は何度も読む時に集中力を高めるために時間を区切ったこと、及びグループ討論を取り入れたことである。ここで行った方法は文を読むきっかけとなり、また物事を多面的に見る訓練ともなった。

1. 4つの方法

この授業で行った方法は「質問書方式」、「SQ3R 法」、「読書百遍」及び「グループ討論」の4つの方法を修正して組み合わせたものである。簡単に言うと、問題意識を持って、何度も読み、グループ討論により深め、最後に質問を無理にでも考えることにより、事物を多面的に把握するのである。最初に4つの方法を説明する。

1. 1 質問書方式

質問書方式は田中一^[2]によって提唱された方法である。その骨子を次に示す。

1. 受講者は講義に対する質問及びその質問の背景など質問の説明を授業時間の終わりに書く。
2. 質問書を読んで評価する。
3. 質問に応じて回答書（場合によっては補講書）を作る。
4. 質問書の評価を成績評価として採用する。

質問書方式はこれ以外に何人かの人の実践報告があるがそれほど多くはない^[2]。最大の理由はコメントを書くのがかなりの作業になるからである。ただし授業の一部としてとり入れている教員は多くなっているのではないか。著者の所属する山手短期大学でも授業中に質問を書

かせる例がいくつかみられる。

ここで行った質問書方式はこれまでのいくつかの実践と異なる点がある。これまでの実践では質問は講義に関連することならなんでもよかった。しかしここでの実践では「講義に関連するが講義の資料や講師の話に答えがない100字以上の質問を考える」ことが課せられる。ここが最大のポイントである。そのため学生は、それまでの自分の知識体験とその日の講義の話を結びつけた思考をせざる得ない。このような質問を作ることは難しく、学生にとって最大の難問となっている。しかし難問を行ってこそ進歩する面もある。文字制限100字以上を課するのは、いろいろな事物の関連の中で質問をして欲しいからである。100字以上とはその関連も考えよということである。また質問は一つということは大事な条件である。短い質問をいくつも考えるより一つの質問を深く考え100字以上にした方がよいと考えるからである。

1. 2 SQ3R

文章を読む場合、慣れない学生はどのように読んだらよいかわからない。一般にはただ漫然と読んで頭の反応を待つだけである。理解できたと思えばそれでおしまい。理解できなければ諦めてしまう。そこで読み方の指針を与える必要がある。ここで使った方法はSQ3Rと呼ばれる方法で、1946年にロビンソンという人が提唱しその後多くの人が改良を重ね、今も改良が続けられている方法である^[3]。この方法は読みながら「質問→答え」という関係を文章から作り出す作業が基本となって、全部で5つのステップからなりたっている。SQ3Rとはこのステップの名前の頭文字をとって名付けられている。そのステップはSurvey（概観する）、Question（質問、疑問を作る）、Read（読む）、Recite（暗唱する）及びReview（復習する）の5つのステップである。

この教育実践でとり入れた部分は「質問→答え」の流れをとり入れる点である。しかしながらSQ3Rとここでの実践とは大きくことなる点がある。本来のSQ3R法では文章に対する質問を作るのは読者であり、1回目のSurveyで質問・疑問を作り、2回目以後でその答えを探すつもりで読んでいく。前々回^[4]の実践ではその方法をとった。しかし読書経験の乏しい学生にとっては、これはかなり難しいことであった。そのため質問・疑問を持つことができず、集中力なく漫然と読むことが多くなった。そこで、主要な部分を理解するための設問を10ほど用意して、学生はその答えを探るつもりで話を聞き文章を読むように指導した。あきらかにSQ3R法の視点から見ると後退であったが、学生の理解度を考慮に入れると、この方が全体としての理解が進むと判断した。

1. 3 読書百遍

「読書百遍義（ぎ）自（おのずか）ら見（あらわ）る」という言葉がある。これは「どんなに難しい書でも何度もくりかえして読めば、意味が自然に明らかになる」との意味である。著

者^[5]は山手短大生活学科で文章を何度も読めば理解はどうなるかについて定量的に調べている。例えば、1年生のゼミでデカルトの「方法序説」を30回読み、理解の程度を1回ごとに記録した。それによると、読む回数が増えるほど理解力の平均値は増した。30回まで上がり続けている。なかには15回ぐらいまで全く理解ができなかったが、15回を過ぎてから急に理解が進んだ例もあった。30回でも上がり続けるが、最初の4、5回でもかなりの向上が見られる。読み方で大切な点は、1行程度を何度も繰り返して読むのではなく、分からなくとも一章くらいを繰り返して読むことである。

この経験を参考にして、できるだけ何回も読んだり、聞いたりする機会を多くすることを行った。内容に関する繰り返し回数はおよそ10回である。またこの授業を行う上でもっとも難しいのは、与えられた資料を学生に何度も集中して読んでもらうことである。具体的な方法については授業の方法で述べる。

1. 4 グループ討論

学生の多くは何かのテーマのもとで討論を行う経験はあまり持っていない。ここではそのような経験を持つことを目的に、その日の内容に関連した用意されたテーマをグループ討論し、そこで話題になったことを記録し提出してもらった。これによりその日の学習内容をより深く理解できることを目指し、またコミュニケーションの練習となることも期待した。討論時間は10分程度である。

2. 授業方法

質問書方式は良い方法だが、著者の所属する学科（短大生活学科）で行う場合一つの問題点がある。それは講義を聴くだけではなかなか一度では理解できない学生が多いことである。もちろんこれには話す内容の難易度や学生の関心が関連している。しかし「見えない世界」は学生が関心のある理解しやすい講義ではない。聞く力も多様である。全ての人が一度で理解できる内容にすることは不可能に近い。またそのようにレベルを下げた講義は適切なものとは言えないであろう。そこで聞くだけでなく自ら読むことを多くした講義にしたのである。もっともこれはもう講義とは言えないかもしれない。

この授業の1回の流れを要約すると次のようになる。

1. 資料を能動的に読むために、読む前に設問を与える。
2. 何度も資料を読む。
3. 教員が資料の説明をする。
4. 最初に与えられた設問に答える。
5. 討論用に与えられたテーマについてグループ討論する。

6. 答えが資料に無い100字以上の質問を考える。

以下に詳しい授業の流れを示す。

1. 出席をとる。授業開始と同時に、小さなカードを配り、前回の授業に関連したことを質問し、それを1分以内に書いて回収する。書けない場合や前回休んだ場合はそのむね書いてもらう。前回学んだことがどれくらい頭に残っているかを調べることができる。また遅刻が少なくなる効果もある。
2. 前回の授業で学生が書いた質問に対する個人への採点結果と、回答書を配布し、重要な質問に関して説明する。回答書は学生の質問の中から20問程度を選び、それに回答を付けている。量としては3000字程度である。これにより学生は他の人がどのような質問をしているかを知ることができる。いろいろな視点があることを知り、今後質問を作る場合に有効になる。なお前回の報告では4000字ほどにしたが、学生の読みの力から言うと、3000字でも多すぎる、この量は授業中だけでなく、授業以外の場でも復習のため読んでもらうことを想定している。
3. その回の授業内容に関する10問程度の設問を書いた設問用紙を配り、説明する。これにより、その日の授業は何を学ぶものかを知り、それに関する設問を頭に入れる。これは、講義を能動的に受ける準備になる。設問は資料又は教員が講義の中で話す中に回答が含まれているものと、考えなければならないもの、あるいは意見を求めるものなどある。単に選択するような設問は出題しない。少しでも考える力をつける訓練をしたいからである。ただし簡単に答えることができる設問も入れている。学生に自信を付けさせるためにはすぐに答えることができる設問も重要である。
4. その回の資料を各自に与え黙読させる。資料は学生向けに教員が書き下ろしたもので量は約3000字である。この黙読の部分が授業で最も重要な点である。簡単な文章ではないので集中せよと言うだけでは集中できない学生が大勢いる。しかしここできちんと読まない授業そのものが成立しない。学生はそれほど長くは集中できないので授業の1回目では8分の時間を与えた。このように短い時間でも、最初は3、4分も集中が続かない学生もかなりいる。教室にストップウォッチを持ち込み、ゲーム感覚で何とか8分持たせようと四苦八苦する。あと2分くらいになると、もう2分だから頑張れと声をかける。日本語なのに、何故8分も保たないのかと最初は不思議に思ったが、これは学生にとっては実質英語などの外国語と同じなのだと考えるようにすると、いろんなことが理解でき、3分程度で机に突っ伏しても腹が立たなくなった。けっきょく前期の授業の終わりまでに読む時間は13分間になった。

読み方のポイントは、「読書百遍」^[5]で明らかになったように、分からない小さな範囲を何度も読むのではなく、資料全体を一度に読み、それを繰り返すように指導してい

る。また分からない言葉は最初から意味を調べることはせず、読み流し文章全体から推定するように教えている。仮に意味を調べる場合も3度くらい読んでから調べるように指導した。学生が文章を理解できないのは、言葉の意味のこともあるが、文章全体の流れや論理性が理解できていないことが多いので、辞書を調べても分かった気にならないことが多い。最初は分からない部分に印を付けるだけでよいと指導している。なお与えた資料には、難しい漢字の読みと、意味の説明は一覧にして載せている。

5. 次に、教員が同じ資料を朗読しながら説明する。この間学生は答えることができる設問に関しては答えている。設問用紙がある種のノートの役割をはたしている。時間は内容にもよるが長くとも20分程度である。
6. 教員の説明後、少し時間を与えて（10分強）文章を黙読しながら設問の答えを書かせる。
7. 設問の回答用紙を学生同士で交換し、先生の回答を聞きながら採点できる部分は採点する。設問の答えは文章回答がほとんどで、○×式より採点しにくい、学生の判断により採点する。
8. 次にその日の授業に関連することで理解を深めるに役立ちそうなテーマを与え、4人のグループで討論する。毎回同じメンバーがグループを組んでいる。なおこの授業は4名が向かいあった形で座れる教室で行っている。時間は10分程度である。議論の内容はグループシートとして提出する。
9. 最後に「その日の講義内容と関係するが資料や教員の説明には答えが無い100字以上の質問を考えること」をする。これがこの授業最大の難問でかつ授業のポイントである。学生がもっとも頭を悩ます部分でもある。これにより資料で得た新たな知識と、これまで自分の中で持っていた知識とを関連づけることを強制的にする。難問だが、自分の知識を関連づけ、物事を多面的に見る第一歩と考えている。
10. 最後に上記質問に関しても交換し、採点者に評価してもらい、提出する。

3. 授業 見えない世界

上記のような授業の結果がどうであったかを述べる前に「見えない世界」という講義について簡単な説明をする。この授業は授業名から推定されるような怪しげな内容（超常現象等）の講義ではない。学生と話していると物事の表面だけを見て判断することが多いと感じることが多かったので、「物事の裏や原因、あるいはいろいろな理由で見えない部分を考える」きっかけになる授業を目指して2002年より始めたものである。大切な授業と判断し最初から1年生前期の必修科目として設置している。2009年度を受講生は132名で3クラスに分けて講義を行った。多面的に考える力をつけることがこの授業の大きな目標である。試行錯誤の結果2009年度では、次の4点を目的として、この目標の実現を図った。

1. 何度も読めば難しい文章も理解できることを体験的に知る。
2. 疑問、質問を作る力をつける。
3. テーマのもとで議論をすることを体験する。
4. 見えない世界を考えることができる。

人間が歴史を通じて作り上げてきた多くのものが言葉で表現されているだけに、文章を読める力は必須のものである。しかしながら学生の文章を読む力は落ちている。学生が文章を読まないのは、読んでも理解できないからである。ここでは愚直な方法だが、「何度も読めば文章の意味は分かる」ことを体験させることが第一の目的である。理解する方法を知ることは、読書離れへの一助になるのではないかと考えている。

第二の目的は疑問・質問を作る力をつけることである。山手学園の教育理念の一つに「自学自習」がある、これができるための第一歩は自分で疑問・質問を考えつけることである。また最近提唱されている社会人基礎力の中にも「疑問を持つこと」という項目がある。このような目的にそって質問をつける力を強制的につけることを目指している。このような訓練はこれまであまり経験していないだけに、効果が期待される。

第三の目的はこの科目ができた本来の理由「見えるものの背景にある見えない世界を考えることができる」ことである。そのために学生にとって比較的身近な例をとりあげ、実は見えない部分を知ると、どんなに理解が変わるかということを示す例を学ぶ材料とした。ただし難易度は高い。

第四の目的は与えられたテーマのもとで、グループ討論を体験することである。学生は学問的なことで、ある目的を持って討論する経験は少ないので、体験させることが重要である。またこのことは、内容を理解させる上でもまた質問を作る上でも一助になればよいと考えた。

2009年度の具体的内容は「何故書物を読む必要があるか」「読書百遍義自ら見る」「質問、疑問の大切さ」「社会と個人を理解する」「多元知能」「食品添加物」「暗くて見えないもの」「電磁波によって見え方が異なる」「小さくて見えないもの」「自然の累層性」である。

以下にこれらの目的が、授業でどのように実現したかを、学生のアンケートを紹介しながら論じる。

4. 何度も読めば理解できる

この講義の第一の目的は「何度も読めば難しい文章も理解できることを体験的に知る」ことである。前回の報告^[1]でも文章を何度も読むことに関して学生が講義終了時でどのような意見を持ったかを、まとめている。今回は学生の読書力の発展という視点からより詳しく紹介する。

4. 1 文章を読まなかった

多くの学生は本を読まない。著者の所属する生活学科学生の図書館利用率は一人あたり年間一冊に満たない状態である。学生の言葉からも、それが伺える。

「私は、この授業を受けるまでは全く「文章を読む」ということはしませんでした。」

「たくさんの字を見て、難しそうな言葉や漢字を見ると、読む前から、分からないし、読んでも意味ないと思い込んでいました。」

「私は文章を読むのが嫌いで、読んでも意味が分からないことが多くて、読むのが苦手でした。」

「私は、まず文章を読むことがあまりなくて、読んでも全然頭に入ってこなくて、途中であきらめていました。」

本を読まない主要な理由は読んでも理解できないからである。読んで理解できる方法を教えることが文を読む絶対条件である。

4. 2 読むとは眺めるだけだった

ところでかなりの学生が読むとは字面を眺めていくだけと思っている。それなりに文章を読んできた教師からすると、読むとは理解しながら読むことだと思っている。しかし、学生にとっては「理解しながら読む」以外に「字面をおっていくだけ」の読みがあり、読書になれていない学生は「字面をおっていくだけ」のことが多い。当然文章は理解できない。したがって「理解しながら読む」ことを覚えさせなければならない。

「私は、昔から本を読むことが嫌いでした。なぜ嫌いだったかという文字を読むということをめんどくさくなって、ただ眺めているだけとかで、内容を理解して読んでいなかったために本が嫌いでした。」

「てきとうに流して文章を読むんじゃなくて、、、。」

「目で通して読むこともありましたが、文章を読まなければ理解しにくいときもあったので、文章を読むようになりました。」

4. 3 何度読んでも分からないものは分からないと思っていた

さて理解する基本は全体を何度も読むことだが、多くの学生は「何度も読んだら理解できる」ことを知らない。不思議なほど知っていない。何度も読んでもけっして分からないと思っている。またこの言葉自身の意味も理解できない。したがって一度読んで、分からなかったらそれまでであり、それ以上は読もうとしない。

「初めての授業で「文章を何度も読むと分かる」ちうプリントを読んで、最初はよく意味がわかりませんでした。私は「分からないものは分からない」と思っていましたし、読んでも分からない本や文章は、読もうとしなかったからです。」

「正直、はじめの頃は先生が「何度も読むと分かる」と言っていた意味が分からなかったけど、、、」

「私は、文章を何度読んでも、分からないものは分からないと思っていたし、分からないから読むこと自体あきらめていました。」

「私は今まで、文章を読む事がとても苦手でした。なので、一回読んだ物をもう一度文の意味を理解しながら読むということなどした事はありませんでした。」

「普段は文章を何度も読むとかしないから、何回読んでも一緒だろう。と言う考えでした。」

「授業を受ける前はあまり文章を何度も読むことは理解する上で、大切だとは思わなかった。」

「見えない世界の授業をはじめに受けたときは、文章を何度読んでも理解することはできないと思っていました。」

「私は文章を何度も読むということは今まで全然しなかったことだと思います。」

4. 4 意欲をもって何度も読む

「眺めていくだけの読書」から「理解する読書」へ変えていくためには2つのことができるようにならないといけない。「理解しようとする意欲を持って読むこと」と「何度も読むこと」である。さて「理解する」と言っても、そのこと自身が理解できないため、単に理解しながら読んでくれと言っても読書経験の少ない学生には通じない。そこで文章に関連した設問を予め与えておいて、その文章の回答を探すつもりで読んでもらうのである。このように設問を与えると、理解できたか否かが、設問に答えることができるか否かの、より具体的な事柄に置き換わることになり、「理解する」ことが分かりやすくなる。

理解しようとしながら読むことの大切さを学生たちは次のように述べている。

「わからなくとも、理解しようとする気持ちを持って読みなおすことが大切なことだと私は思った。」

「文章というものは、あきらめずに、しんげんに読めば理解することが出来るんだということが分かった。」

「文章というものはただたんに読み進めていくのではなく、自分で理解しながら読みすすめていくことが大切だと思いました。」

意欲のもとで何度も読むことを行うのだが、慣れない間はこれが一番難しい。学生をなだめすかして読んでもらう。そのためにはストップウォッチできめられた時間内にどれだけ読めるかをゲーム感覚で行い。集中を高める。このように集中して何度も読むと多くの学生は文章が理解できる。読めば読むほど理解が進むことを体験する。

「最初は何回も読むだけでは理解なんかできないだろうと思いました。1回読んでも5回読んでも分からない文章は分からないと思ったからです。けど、この授業で何回も同じ文章を読んでいると、最初はよく分かんなくても最後に読んだ時には、なんとなく分かるようになって

いたのは確かです。」

「1回目では分からなかったこともくり返し読むことで全体が見えてきて理解しやすくなったと思います。」

「文章を何度も読むと分かる」という課題は私にとって慣れないことでした。何か本などを真剣に何度も何度も読んだことがなく、最初は集中力との戦いでした。でもやっていく中で理解力や集中力を身につけることができ「文章を何度も読むと分かる」という言葉の意味が分かるようになりました。見えない世界の授業は終わりますが、これからも自習的に何度も読んで理解するという事はやっていきたいと思います。」

「最初の授業では、文章を何度も読むと分かるって書いてあったけど、そんなことないんじゃないかと思っていました。でも最初の授業で、文章を何度も読むと自然に単語と単語がつながって、分かるようになって本当だなと思いました。」

「文章を何度も読むと分かる」と先生が言われていましたが、私は本当にその通りだなと思いました。文章を普通に読んでいたら、その言葉の一つ一つ、流してしまっていて読むことになりません。でも、何度も読むことによって、その文章の言葉の意味、理解がわかっていくと思います。だから私は、文章を何度も読んで言葉を理解していくことは、いいことだと思いました。」

「私は設問の意味を理解できなかつたりすることが多いんですけど何回も読んだら分かりました。」

「私は基本あまり本を読まない方で文章を読むことが苦手でした。でもこの見えない世界の授業で何度も読む大切さを学びました。確かに何度も読むことで理解力がついた気がします。」

「実際に文章を読んで最初に感じた意味と一番最後に感じた意味がまったく違ったりしました。」

「何度も読むことは結構大切なのではないかと思います。今までは、難しい文がただ読んだだけで理解できるようになる訳がないと思ってましたが、確実に読むスピードも上がってるし、毎回の問題に答えられる速さもどんどん上がってくるのが分かった。」

何度も読むことはこれだけでは終わらない。この授業での最大の課題は100字以上の資料に答えの無い質問を作ることです。そのためにはよりいっそうの理解が必要になりさらに何度も読むことになります。これについては「質問・疑問の能力は高まったか」で述べます。

4. 5 読書の広がり

何度も読んで理解できることは楽しいこととなり、次に繋がる。

「私は、文章を読むことが大嫌いで、理解しようとしませんでした。しかし、見えない世界の授業を受けて最初の方は、無理矢理読んで、無理矢理に分かろうとしていた気持ちが、理解できるようになるとなぜか、文章を読むことが楽しくなりました。」

「私は今まで、文章を読む事がとても苦手でした。なので一回読んだ物をもう一度文の意味

を理解しながら読むという事などした事はありませんでしたが、見えない世界の授業を通じて、何度も繰り返し読むことで、一回読んだ時に理解出来なかった事も、二回じっくり読むと分かってくるし、文書を読むという事は私にとってたくさんの発見がありました。」

このような読書体験を持つことは次の読書へ繋がっている。

「この授業を始めてから、自分から本を買って読むことが今まで無かったのですが、日常生活でも本を読む習慣ができました。」

「秘書検定のときとか、何回も読み直しをして、文を理解できたから合格できました。」

文章を読むことの抵抗が一番多いのは「理解ができないから」である。これに対して何度も読むという、時間がかかる愚直な方法だが、具体的方法を示し体験させたことは、文章を読み始める、よいきっかけになったと考える。

5. 質問・疑問の能力は高まったか

この講義の目的の二つめは「疑問、質問を作る力をつける」ことである。質問を作ることはこの講義の最大の難関だが、質問をつくる能力は高まったであろうか。かなり高まったことを前回^[1]紹介した。今回は質問ができるようになるまでの過程に焦点を合わせて学生の意見をまじえながら紹介する。

5. 1 質問の経験は少ない

講義の一回目で「講義に関連するが講義の資料や講師の話に答えがない100字以上の質問を考える」ことが課せられる。これには多くの学生が驚く。それは、これまでそのような課題を課せられたことが無く質問を作るなどの経験がほとんど無いからである。

「普段の生活の中では、ふと疑問を持つことはあっても「質問を作りなさい」と言われて考えたことはなかったので、」

「私は今まで学校に行っていて、いろんな勉強をしてきましたが、「質問する力をつける」ということは、あまり深く考え学びませんでした。」

「始めの方は、どんな質問を書こうかな？と、すごく苦戦していました。ほんとうに全く思いつかなくていつも頭をかかえていました。それだけ今まで私は質問するとゆうことや、何かに疑問を持ったりしなかったのかなあ、と正直自分のことだけビックリしました。もっと質問することが思いつくと思っていました。」

「今まで質問を考えたことはあまりなく、」

質問とは自然に浮かぶもので強い意志で無理矢理作る物では無い、という考えが浸透しているようだ。

5. 2 質問の意味がよく分からない

質問を作ってくれという言葉の意味さえはっきりしない学生もいる。

「初めは「質問を考える」意味すら分からず、戸惑いました。」

「初めは、質問をしなさいと言われてもまったくピンとこなくて何を聞けばいいのかも全然浮かなくてすごく困ってました。」

「質問をするという意味自体がわからず自分で質問を考えるなどできるはずがないと思っていました。」

5. 3 質問の意義を伝える

最初に学生に伝えることは質問を作る意義である。もちろん言葉だけではなかなか伝わらない。しかし意義を言わないと困難に立ち向かう意欲をおこさせることはできない。したがって授業の最初のころに行くことは、質問を作る意義を伝えることである。伝えた意義は次のようなことである^[4]。

1. 疑問・質問を強制的に作ることは新しい情報と既にもっている知識との関連を強制的に考えることになる。考える力とは一つには物事の関連をつかむ力である。疑問・質問を作ることはそのような力をつけることになる。物事の関連を考えることは当然、物事を深く理解することに繋がる。
2. 社会での仕事は疑問・質問が出発点になることが多い。仲間の中でそのような問いを発する人がいなければ、そのグループは仕事ができないグループになる。質問・疑問を持つことは生きる力そのものとも言ってよい。
3. 質問を強制的に作ることは実際にはよく行われていて、とても役にたつものである。

5. 4 良い質問の例を見せる

意義を伝えるだけでは質問は生まれない、結局、他人の良い質問をたくさん見せることが質問を理解させる良い方法である。そのために学生の質問から20ほど選んで作った毎回の回答書はとても役に立つ。

「先生が授業の始めに配って下さる、みなさんの質問集を見て様々な質問を読むうちに、質問とはどのようなものかわかりました。」

「最初はまったく質問が思いつかず苦戦していました。でもだんだんみんなの質問内容を見たりしていくうちに「あっこんなふうに質問すればいいんだ!」とわかり、文章の中から不思議に思った部分をピックアップして質問するようになりました。」

5. 5 分からない事に関する質問

そうかと言って、質問がすぐにできるようになるわけではない。最初は単に内容が分からない点に関する質問である。しかし、そのような質問でも漠然とした感じしかなく、明確な形で質問になるには、一步の前進が必要である。

「話を聞いたり、プリントを読んだりするときに「これはどういうことか?」と考えながら読むようになりました。意識して読むことによって「そのプリントのここはわかるけど、ここはわからない」とか「わからないところは、どの部分がわからないのか?」など、ただ「わからない」ではなくて、具体的にわからない部分を自分で考えてから質問できるようになったと思います。」

5. 6 理解してからの質問

しかしながら求められているのは「資料や先生の話に答えの無い質問」である。この質問ができるようになるためには、まず理解する必要がある。そのあたりの事情を学生は次のように述べている。

「授業の最初の方は、何を質問していいかもわからなかったのですが、何度も何度も読んでいくうちに、疑問がたくさんうかびあがってきました。質問する力をつけるというのはまず初めに文章を理解しないとできないということがわかりました。理解できると、次は疑問に思うことがたくさん出てきたのでとても楽しいと思いました。」

「無理矢理にでも何か質問することがないと必死になって探し、何度も文章を読み返していました。そのおかげで、文章の意味が理解でき、そのうえ“どうして?”と思うことができ、質問を書くことができました。」

「質問をするというのは、とても難しく苦戦しました。自分が理解しやすかった文章の時と理解しにくい文章で全然違いました。理解しにくい文章のときは、理解するまで質問を作れないのでとても大変でした。」

「質問を作ろうとすると文章を理解していないといけません。だから文章を必死に読みました。質問を作ろうとするのはむずかしいと思うけど文章を読めばある!ということを知りました。」

5. 7 質問には興味が必要

質問を考えつくには興味がわかないと出来ないことをさかんに述べる。

「興味を持つってことも大事なやときづけました。質問するにはまず相手にしても、物事にしても興味を持つことが大事やと思うし、持たないと逆に質問も出てこないと思います。」

「質問を作るにはまずその事について興味を持つということだと思うんです。」

5. 8 質問には強い意志も必要

さらに質問を考えようとする強い意欲も必要になる。何度も読んで理解が進み、それを前提として興味が生まれてくる。その上で質問を生み出そうとする強い意志が必要なのである。

「自分から知りたい！と思うようにならないと、質問は出来ないので、知ろうと思うことは大切だと思います。」

「質問を作る力がついたかどうかは私にはわかりません。でも質問を必死に作ろう！という意思は生まれました。」

5. 9 100字書くことは大変

しかしながら質問が浮かんでも100字の質問はまだ書けない、言葉にするのは意識の中でより明確にする必要がある。

「私は今まで疑問を持った問題でもあまり質問することはありませんでした。なぜかというとう質問して良いか、どうまとめたら良いか、わからなかったからです。」

「最初は質問をする事なんて簡単だと思っていました。でも実際に質問を考えるのはとても難しく最初はとても悩みました。今までは質問をすると言っても簡単な文章で質問をしていたのでいざ100字以上となると、とても難しかったです。」

5. 10 質問が速くなる

訓練をくり返すと多くの学生は、単なる分からないとは異なる質問ができるようになってくる。質問を思いつく時間が速くなることで学生は進歩を実感する。

「第一回目などと比べると最後の方には、すらすらと質問が書けるようになったし、文章を読む時に「なんでこれはこうなるんだろう？」と疑問を持ちながら読めるようになったと思う。その点では質問を作ったり、考えたりする力はついたと思う。けれど「いい質問」と呼べるようなものはまだ作れていない。」

「私は毎回質問を考えるのに時間がかかり、あまりよい質問を作れませんでした。でも始めらへんの授業よりは、質問を思いつく時間は速くなりました。」

「最初は本当に何を書いてどんな質問をしたらいいのかまったくわからなくて困りました。でも何回か授業をしているうちに、プリントの意味も分かるようになって質問を考えるのがあたり前になってその授業のプリントをもらった時から、「今日の質問は何にしよう？」って考えるようになり、すらすらと書けるようになりました。」

「今まで、私たちはテストや授業などで、質問されていた側でしたが、この授業で質問を初めて考えた時はすごく難しくて時間もかかりました。でも何回も質問を考えていくうちにだんだんと質問をすぐ思いついていきました。」

「最初はとても苦戦していました。そんなことして何の役に立つのだろうと、、。だけど毎回

苦戦しながらも考えて考えて書いた質問はだんだんすらすらと頭の中からしぼり出してくるんじゃないくて、ぱっと頭に浮かぶようになりました。」

「私はあまり疑問を持たない方だと思っていたので、この授業は苦手でも嫌いでした。最初のころは書いても100字に全然届かずうんざりして、この授業が必修じゃなければよかったのにと何度も思いました。けれど根気よく授業を受けるにしたがって、文章も以前より、ずっと思っていることを書ける様になったり、質問内容もすぐに考えつくようになりました。」

「慣れてくると自分の頭の中にポンポンと質問が浮かんできて、回答が早く知りたいと思うようになりました。」

5.11 質問は楽しい

質問を作ることが楽しくなった学生もいる。

「授業をしていくうえで、文章ののっていない質問をすることはなんだか楽しかったです。さがしていると、たくさん質問が出てくるので、楽しみも覚えました。」

「最近になってから、授業で配られるプリントを読む時、読みながら質問を考えることが楽しくなったと思います。“質問”という言葉に興味が沸くようになっただけでも質問をする力はついてきたのではないかと思います。」

5.12 見えない世界以外でも質問が浮かぶ

ここまでくると質問する力は当初に比べてかなりついたと言ってよい。見えない世界の授業以外や日常生活でも質問が浮かんでくる。

「この授業のおかげで、他の授業での質問や、日常生活で出てくる疑問が増え、自分で考える力が増えたなあ実感しました。」

「見えない世界の授業の他にも文章を見ると質問を考えてしまう時があります。」

「私は、この授業で質問することがいかに大事か改めて思いました。友達と会話するとき、テレビを見ているとき、雑誌や本を読んでいるときなど日常のいろいろな場面で疑問を持つようにしています。いつもだったら何も思わなかったりしていたことが、疑問を持つことによって、人と会話ができたりして少し変わったんじゃないかと思います。」

「新聞の記事を読むときなども、小さな事でも、大きな事でも、とりあえず疑問を抱くようになりました。」

「私は最近すぐに疑問や質問がでてくるようになりました。なにかが存在しているのはぜったいに理由があるからだと思うので、それを知りたいと考えるようになりました。」

「授業内で配布された文章と、先生の説明以外で質問を考えることはとても大変でした。ですが、この授業で質問を考えることをしてきて、普段友達や先生、家族などと何気なく会話をしていた、いつもは自分が本当に理解できなかったところだけを質問したり、聞き返したりし

ていましたが、本当は何気なく聞いて理解していると思っていたことの中にも本当は分からないことや質問が出来ることがあるんだなと思いました。この授業を受けてから質問をする力もついたと思うし、会話の中でもよく質問するようになりました。」

「いろんな人に質問をするようになったし、幅広い内容の会話ができるようになったと自分ではそう思っています。」

「今の生活の中でも、色んな事、質問をしていきたいと思った。質問は頭の中で考えていた事を文字にしているし賢くなりそうな感じがします。」

これまで質問を考えなかったことを反省している学生もいます。

「私は何故疑問に思わなかったのだろうと、日頃どれだけ自分がいろいろな事を見逃してきたのかと思い知らされました。」

6. グループ討論

「見えない世界」の授業で今年度初めてグループ討論を取り入れた。より深くテーマを追求することと、テーマを定めた討論を経験することが目的である。グループは4名で、グループメンバーは乱数を発生させて定め、途中でグループを変えることは行わなかった。討論テーマは教員が用意し、各回の内容の理解をより深めるものにした。討論時間は凡そ10分である。詳しくは田中、石井、渡辺^[6]で報告している。

討論したテーマは具体的には次の物である。決して易しいテーマではない。「何度も読んだら分かったという体験はありますか」「今回は言葉の大切さを強調しましたが、絵も重要な働きをしています。言葉の方が表しやすいもの、絵の方が表しやすいものをそれぞれ考えて下さい」「実際に一冊の本を何度も読んで理解するという体験をしてみたいですか。心惹かれる点、無理だと思う点を話し合ってください」「あなたの経験（あるいは考え）から習熟度別学習の良い点と悪い点を討論して下さい。またあなた方はどちらを受けたいですか」「あなたは、困難があっても、多くのグループに入って活動したいと思いますか。グループに入らないと成長は難しいです。さてどう考えますか」「多元知能のアンケートの結果に対して感想を話し合ってください」「あなたは、食の安全のために、個人的にはどういう食生活をしたいですか」「真っ暗の中で観測できるカメラがあったらどんなことに使いたいですか」「今日の質問集のコメントにたいいていのは「多すぎても、少なすぎてもいけない」と書いてありました。資料にのっていない具体例を考えて下さい」「「何かがより小さな物からできている」例で資料には無い例を考えて下さい」

グループ討論の様子は決して活発ではなかったが、学生の評価はこちらの予想よりずっと高いものであった。

第一は楽しいということである。

「自分ではおもいつかないような意見を聞いて楽しかったし、今まで話したことが無かった

子とも、話すことで仲良くなれたりしたから、グループ討論はあってよかったと思うし、この「見えない世界」の授業で皆で話し合ったり、意見を出し合ったりできるグループ討論の時間が一番楽しかった。」

もちろん最初から討論がうまくいったわけではない。

「グループで向き合って話合いましたが、私はこういうグループで考えるなどが苦手なので最初は少し困りました。でも一つのことについてたくさんで考え意見を交換すると、さっきも言ったように自分と違った考えを知ることができるし、自分の考えに対する人の意見、人の意見に対してまた自分が新しい考えを持つことができますと思います。なのでグループ討論はよかったのかな、と思います。」

「初めての授業の時は、知らない子たちの中でグループ討論をするのはとても嫌でした。しかし、友達となかよくなり始めてみんなでするグループ討論は面白かったです。討論の時間が少ないとは思いますが、人の思っていることと自分が思っていることには、こんなにも差があるんだなと思ったり、共感したりと楽しかったです。」

否定的な意見もあったが大半の人は価値を認めている。まずはコミュニケーション力がつく点である。

「授業の最後でやるグループ討論は、普段はあまり意見を言ったりしない私がこのグループ討論で少し意見を言ったり出来るようになりました。私は違うかったけど、こういうグループ討論で誰か一人はまとめたりしないとだめだからその力もつくんじゃないかと思いました。」

グループ討論ではいろいろな意見を知ることができ、それがよかったと述べている人が大勢いた。

「グループ討論はあったほうが良いと思いました。自分は「絶対にこうだ」と思った考えも、グループ討論を通じて相手の意見を聞くことで「自分の考え以外にもそのような考えがあるんだな」と新しい意見を知ることができたのでグループ討論はあったほうが良いと思いました。」

見えない世界ではグループ討論は初めての経験だったが、楽しい、他人の意見を知れる、認識が深まる等のよい点があった。グループ討論はいろいろな可能性を持っているようだ。

7. 見えない世界が見えたか

見えない世界は「物事の裏や原因あるいは、いろいろな理由で見えない部分を考える」きっかけになる授業を目指して2002年より始めたものである。その目標は達成できたであろうか。この授業を受けて学生はどのように変わったであろうか。これについては前回の報告^[1]で詳しく報告した。今回は何人かの学生のコメントを紹介するに止める。

「今まで物を見る時は、上からとか横からしか見ようとしませんでした。が見えない世界の授業を受けて、下から見たり、中を覗いて見るという考え方が浮かぶようになりました。」

「自分はこれしか考え方が無い！！と思っていることでも、他の人の意見を聞くことでこん

な答えがあるんだ、。こんな考え方もあるんだ、。と思いました。」

「何でも、表面だけから見てたらダメだと思いました。見えない所もしっかりつかむことによって新しい発見があるのだと分かりました。」

「違う視点で物を見ると考え方も変わるんだなと思いました。」

「何を見てもこれはどうしてだろう、何でこうなったんだろう、どうゆう風にこうなったんだろうと日常でも考えられるようになりました。」

「何に対してもしょーもないと思ったりしていたけど最近ではあまりそういう考え方はしなくなった。」

「これまで、私はこう見えたらこうだとか、こう考えたらこうだとか、一つの見方や考え方しか思っていませんでした。だけど、ちょっとした事で色々な見方や考え方があるのだと気づきました。視野が広がりました。」

「私は考え方が変わったと思います。例えば、思ったことをすぐ口に出さないようになったことです。少し考えてから話すようになりました。」

「授業を受けているうちに、この世界は見えないことだらけで、しかもそれが私たちの生活に大きな影響を与えていることがわかりました。なので、その見えないものを追求している自分がいて、いつもあたり前だと思っていることも、あたり前だと思わないようになりました。」

「物事を主観的ばかりじゃなくて客観的に見ることができるようになってきた気がします。」

「この授業で習ったことは知らないことが多く、今までは知らなかったことに対して特に何も思っていませんでしたが、この授業を受けてからは普段気にならないものでも、何か自分の知らないことがあるんだな、とか、これは何が元になっているのかな？とか思うようになりました。」

この授業の目的は十分に達せたと思っている。

8. まとめと今後の課題

この授業の方法は結局、3000字程度の文章を何度も読ませることと質問を作ること、それに10分程度のグループ討論である。これにより文を読むことのきっかけとなり、また物事を多面的に見る訓練になった。これは多くの科目で実現可能なことである。そのためにも次のことを研究課題として予定している。

1. 3000字程度の資料ではなく、1000字から1万字程度の文の場合理解はどうなるか。またどのような文章なら、何回ぐらい読めばよいのか。定量的に確かめること。
2. いろいろな科目で数千字を読むことを行う方法をさぐる。
3. グループ討論のテーマはどのような物がよいか。

参考文献

- [1] 田中 裕. 2008年. 「質問書方式による考える力をつける教育実践2」 神戸山手短大紀要, 51, 15
- [2] 田中 一. 1999年. 『さよなら古い講義 質問書方式による会話型教育への招待』 北海道大学図書刊行会
- [3] Study Guides Strategies. The SQ3R Reading Method. <<http://www.studygs.net/texred2.htm>> (アクセス日2009年11月)
- [4] 田中 裕. 2007年. 「質問書方式による考える力をつける教育実践」 神戸山手短大紀要, 50, 35
- [5] 田中 裕. 2006年. 「「読書百遍義自ら見る」は正しいか」 神戸山手短大紀要, 49, 67
- [6] 田中 裕, 石井富久, 渡辺卓也. 2009年. 「講義型授業におけるグループ討論の試み」 神戸山手短大紀要, 52, 37